View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

歌のある民話の分類試案

An idea of classification of folktales which include songs.

酒 井 董 美
（総合文化学科元非常勤講師）

キーワード：昔話、歌

1. はじめに

昔話を眺めると、中に歌が出てくる話が時々見られる。子どもの時代に祖母などから聞かせてもらった話を思い出そうとするとき、ストーリーそのものははっきり思い出せなくても、中に歌われていた歌だけは覚えていたということが、昔話について話し合っているおりによく聞くことでもある。ある意味では記憶の中で歌は物語の中核をなすものであると言えるのではなかろうか。

そして語り手の方々がその歌を中心にしながら、次第次第に全体像も思い出されてきたという経験を、多くの民話採録者もお持ちであろう。

本稿では昔話の中に挿入されている歌について述べることにしたい。取り上げた話は、「ぴんこひよどり」（石塚尊俊他編『出雲の民話』未来社）の一話を除いて基本的に筆者が直接収録したものである。

2. 種類について

ところで、本稿でいう歌であるが、特に本格的なメロディーを持たなくても、語り手がうたうような気持ちで語っているものを、ある程度幅広くここでは歌と考えている。つまり擬音や動物の鳴き声とか、短歌、唱え言葉、場合によっては経の文言なども含めるようにした。

それではまず昔話の中に出てくる歌をその性格によって分類することにしよう。

【表】昔話に現れる歌の分類試案

A	定型詩的な歌	(1) 歌問答（a 短歌型・b 新体詩型） (2) 唱え言葉 (3) 踊り歌
B	自由詩的な歌	(1) からかい歌 (2) 主人公の気持ちを歌った歌 (3) 労作歌

		(4) 問答の歌 (5) 暗示の歌 (6) 呼びかけと答えの歌
C	前の項目に属さない歌	(1) 動物の鳴き声 (2) 擬　音

3. 事例を眺める

続いて分類で示した順に具体例を眺めることにする。「ぴんこひよどり」を除きいずれも拙著『ふるさとの民話』(ハーベスト出版・全 15 集) から採ったもので、(⑦.114 ～ 1150) とあれば『ふるさとの民話』第 7 集．出雲編Ⅱの 114 ～ 115 ページに、その事例が掲載されていることを示している。

1)　定型詩的な歌

(1) 歌による問答など

a 短歌型 (５７５７７))

① 仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん (明治 27 年生) の「三人小僧の歌」から。小僧たちの詠む歌。(⑦.114 ～ 115)

春三月　月の夜に　桜の花がちらちらと　雪が降るかと思いけり
春三月　月の夜に　先に行けば後に影がさす　人が来ると思いけり
この寺に小僧三人　餅二つ　若には食わせまいと思いけり

② 東伯郡三朝町大谷の山口忠光さん (明治 40 年生) の「和尚と三人小僧」から。三人の小僧の詠む歌。(⑪．74 ～ 76)

十五夜の庭に影さす松の枝　切りたくもあり切りたくもなし
硯箱かけごに余る筆の軸　切りたくもあり切りたくもなし
梨一つ惜しむ和尚の細首を　切りたくもあり切りたくもなし

③ 隠岐郡海士町多井の木野谷タマさん (明治 19 年生) の「三人小僧の歌比べ」から。三人の小僧が詠む歌。(⑮ 103 ～ 105)

地獄の先の鬼唐臼　死(す)んで行かねば　わしゃ搗かん
膠(にかわ)でつけた石仏　温(ぬく)もりが入(はい)らにゃ　わしゃ搗(つ)かん
沖におる走り船　磯が荒れて　わしゃ搗かん

④ 隠岐郡知夫村仁夫の中本おまきさん (明治 38 年生) の「難題婿 (木蔵とお花)」から。(⑮ 126 ～ 127)

天より上の咲く花に　心がけるな　庭の木蔵 (お花)
天より上に咲く花も　落ちりゃ木蔵の下になる (木蔵)

⑤ 隠岐郡西ノ島町波止の松浦武雄さん (明治 35 年生) の「過ぎし昔の秋に問

わばや」から。（題と歌の詞章がずれているが）（⑨ 54 ～ 58）

碓氷（うすい）とは互い染めし濃き紅葉（家臣）

古き昔の秋に問わばや（風呂焚きの男）

※　「古き」ではなく、過ぎし、のはず。語り手の話したタイトルと語りの中に出てくる歌の詞章とがずれている。

⑥　鹿足郡吉賀町柿木村柿木の竹内玄道さん（明治 23 年生）さんの語り、太閤と曽呂利新左衛門」の歌。（⑧ 45 ～ 46）

柿の本に人麿こそは見えにけり　ここは明石の浦か白波

たいせつな御前で恥を柿の本　人麿ならで顔は赤人

⑦　隠岐郡隠岐の島町郡の村上春水さん（明治 34 年生）の語り「仲良し夫婦と仲悪夫婦」の歌。（⑨81～83）

長かれと願う命の短くて　要らざるわたしの髪の長さよ

長かれと思う布団の短かくて　要らざるおやじの足の長さよ

⑧　東伯郡三朝町大谷の山口忠光さん（前出）の語り「太閤さんの歌比べ」から。四人の詠む歌。（⑤123～128）

天と地を団子に丸め手に乗せて　ぐっと飲めども喉にさわらず

天と地を団子に丸め飲む人を　鼻毛の先で吹き飛ばしけり

髪の毛を千筋に割（さ）いて城を建て　百万えきの篭城をする

蚊のこぼす涙の海の浮島の　真砂拾いて千々に砕かん

⑨　木野谷タマさん（前出）の「侍とおやじの歌比べ」から。（⑮ 171 ～ 173）

禿（は）げ山になぜに鳥居（とりい）が見えぬやら　すこしをするに髪（かみ）がますます（侍の歌）

名所古蹟（こせき）は多けれど　花（＝鼻）のないのが寂しかるらん（おやじの歌）

⑩　隠岐郡海士町知々井の川島芳博さん（大正 3 年生）の語り「雪とぼた餅」の歌。（⑮ 146 ～ 148）

雪降るに木茅の枝も見えもせず　下のぼた餅ゃどげしただやら

雪降るに木茅の枝も見えもせず　里の親し（衆）は　どげしただやら

b　新体詩型（７５７５…）

新体詩には７５７５調と５７５７調の二通りがあるが、７５７５調のものが見つかった。

①　米子市今在家の松原あきさん（大正 12 年生）の「一把の藁十六把」から。婿に認められる男の歌。（⑫ 93 ～ 94）

とんと入りゃ庭（二把）ござる。庭の向こうに鍬（九把）ござる。

この家（や）のばばあに皺がある。手持ちの一把で十六把

（2）．唱え言葉

① 隠岐郡知夫村仁夫の中本おまきさん（前出）の「猿蟹合戦」から。蟹の唱え言葉。（⑨ 183 ～ 187）

早く芽を出せ　柿の種　出さぬと鋏で　挟み切る

② 松江市八雲町熊野市場の稲垣カズコさん（明治 39 年生）の「節分に豆をまかない家」から。長者の豆まきの唱え。（⑦ 80 ～ 82）

鬼は外、福は内、家内安全　まめ息災なように

③ 隠岐郡隠岐の島町中里の半田弥一郎さん（明治 45 年生）の「ネズミ経」から。偽和尚から習ったお経をばあさんが唱える。（③ 99 ～ 104）

ひょろひょろござった　　ひょろひょろござった　　はいつくぼった
ひょろひょろござった　　ひょろひょろござった
はいつくぼった　　はいつくぼった

④ 出雲市平田町の錦織義宣さん（生年不詳）の「飯山狐」から。和尚のお経は、唱え。（⑬27～32）

妙、法、蓮、華、経、序、品、第、一

（3）踊り歌

① 仁多郡奥出雲町竹崎の田和朝子さん（前出）の「長吉の災難」から。天狗が小屋の外で長吉をからかう歌。（⑬ 184 ～ 187）

イッテングー　ニッテングー　サンテングー　スィーテング
長吉そえて五天狗（一天狗　二天狗　三天狗　四天狗　長吉そえて五天狗）

② 仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん（前出）の「瘤取り爺」から。（① 186 ～ 189）

天狗 天狗 メッテング（天狗 天狗 三天狗）
天狗 天狗 メッテング（天狗 天狗 三天狗）－天狗が踊りながらうたう歌－

天狗　天狗　メッテング　じいをそえて　ヨッテング
（天狗　天狗　三天狗　爺を添えて四天狗）－爺がうたう歌－

B　自由詩的な歌

（1）からかい歌

① 出雲市乙立町の伊藤アキコさん（明治 38 年生）の語り「かちかち山」から。狸がじいさんをからかう歌。（① 30 ＝ 35）

あほのじいさん　畑（はたけ）打ち
豆のないのに　えっさっさ

② 仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん（前出）の語り「瓜姫とアマンジャク」から。アマンジャクが瓜姫になげつける歌。（⑬43～47）

そう　そう　そう　瓜姫さん　シイタン（芯）ばっかぁ
そう　そう　そう　瓜姫さん　サネ（核）ばっかぁ

③　米子市淀江町亀甲の世川静子さん（大正 14 年生）の「食わず女房」から。夫が歌う。（④ 84 ～ 95）

米三升に、カレイ三枚、
ああ、すっぽらぽーん、すっぽらぽーん、
すっぽらぽーん、すっぽらぽーん、
米三升に、ざーく　ざく　ざく、
カレイ三枚に、ああ、すっぽらぽん、すっぽらぽん、
すっぽらぽーん、すっぽらぽーん、

（2）主人公の気持ちを歌った歌

①　東伯郡三朝町大谷の山口忠光さん（前出）の「千年椿の槌と小僧」から。（⑪ 129 ～ 131）

千年過ぎし　この寺　チャチャボラチャ　アー　チャッ　チャッ　チャッ
アー　チャッ　チャッ　チャッ（椿の妖怪）
二千年過ぎし　この寺　このススぼらぼ　バッバッバァー
二千年過ぎし　この寺　このススぼらぼ　ブッブッブゥー（小僧）

②　米子市観音寺の浦上金一さん（昭和 3 年生）の「化物問答」から。妖怪たちが歌う歌。（⑫ 141 ～ 150）

あなたごすなら　わしゃ茶柄杓（ちやびしやく）　茶柄杓よ
あなた茶柄杓なら　わしゃ茶筅（ちやせん）　茶筅よ
あんたごすなら　わしゃ茶柄杓　茶柄杓よ
あなた茶柄杓なら　わしゃ茶筅　茶筅よ

③　松江市北堀町の山田理恵さん（昭和 32 年生）の「いいもの食いたい楽したい」から。文吉が歩きながら歌う歌。（① 36 ～ 39）

良いもの食いたい　楽したい　人のものがみなほしい

④　仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん（前出）の「瓜姫とアマンジャク」から。瓜が流れてくるときの婆さんの言葉。（40 ～ 46）

も、ひとつ流れりゃ、じいさんの土産
も、ひとつ流れりゃ、じいさんの土産

⑤　隠岐郡隠岐の島町布施の中川ハル子さん（明治 45 年生）の「桃太郎」から。桃の流れてくるときの桃の歌う歌。（③ 134 ～ 137）

ドンブリカンブリ　コービシャコ
ばばの口にヒョイと入れ

⑥　東伯郡三朝町大谷の山口忠光さん（前出）の「舌切り雀」から。おじいさんの道行きのときに歌われる歌。似た歌は多い。（⑪ 48 ～ 56）

舌切り雀　どぉこ行た　チュッチュッ
舌切り雀　どぉこ行た　チュッチュッ

舌切り雀　どぉこ行た　チュッチュッ
舌切り雀　どぉこ行た　チュッチュッ

⑦　江津市桜江町谷住郷の島田朝子さん（前出）の「千人坊主」から、連れてこられた木樵が唱える。（② 131 ～ 132）

ワーシャ、コーレノー　背戸へコーソ　藤葛（ふじかずら）　立テコソ　行キタリ
千人坊主ノ　ターリーカーニー　ショウトテー
頭巾脱ギャ　毛ガデール　……

（3）労作歌

昔話の中で登場人物が仕事とか動作をしながら、それに合わせて歌われる。別な表現をすれば「労作歌」といえる歌である。細かく分けると「機織り歌」「田植え歌」「米つき歌」などと表現できる。

①　仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん（前出）の「瓜姫とアマンジャク」から瓜姫が機を織るときの「機織り歌」。（① 40 ～ 46）

じいさん　サイがない　　ばばさん　クダがない

②　東伯郡三朝町大谷の山口忠光さん（前出）の「舌切り雀」の中でも雀の歌として類歌が歌われている。（⑪ 48 ～ 56）

サイのない　おじいさん　クダのない　おばあさん　スットントン

③　飯石郡飯南町八神の寺西スエコさん（大正 3 年生）の「竹伐り爺」の放屁のときの音。（① 132 ～ 136）

日本一の屁こきじい　スッポンポンノ　ポーン

④　仁多郡奥出雲町下阿井の井上掏佶さん（明治 19 年生）の「金の犬こ」（① 16 ～ 27）から、吾一や長者が米を搗くときの「米つき歌」。

千石、万石。数知らず

⑤　仁多群奥出雲町竹崎の田和朝子さん（明治 40 年生）の「桃売り婿」から。婿の売り声。いわゆる「物売り歌」である。（⑦ 20 ～ 25）

一つとせ　一夜寝たも袖枕
二つとせ　二重屏風のその中で、君の心は冴えもせぬ
三つとせ　見てさえ心は冴えもせぬ
四とせ　夜ごと忘れる暇もない
五つとせ　いつやら君に会うだやら

六つとせ　六日の月は冴えるもの。君の心は冴えりゃせぬ
七つとせ　なんなく住むも泣き暮らす
八つとせ　屋形の原でなく鹿は、妻が恋しと鳴くじゃもの
九つとせ　ここで裁縫見習え
十とせ　奥におれども南小風に誘われて、来たかと思えば懐かしや

⑥　松江市八雲町熊野市場の稲垣カズコさん（明治 39 年生）の「食わず女房」からの「妖怪女房の作業歌」。（⑦ 160 ～ 168）

やあこれは蒸すことができた　ヤットコショ　ドッコイショ
ああまたもう一ぺん　もう三べん　またドッコイショ　ドッコイショ

⑦　隠岐郡隠岐の島町加茂の橋本オヤスさん（明治 37 年生）の「鼠浄土」から。ネズミたちが餅つきで歌う「餅搗き歌」。（⑮ 128 ～ 130）

猫さえ来ねば　国はわがもの　スットンカラ　スットンカラ

⑧　仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん（前出）の「初夢長者」の中で歌われる「田植え歌」。（⑬ 167 ～ 172）

婿さんがござる道に　板の橋を掛きょうか
アラ　板の橋ゃどろどろめいで　金（かね）の橋を

⑨　八頭郡智頭町波多の大原寿美子さん（明治 40 年生）の「笠地蔵」から。地蔵が爺の家へ荷物を運ぶときの「掛け声歌」。

ああ、えっさら　えっさら　えっさら　えっさら
えっさら　えっさら　えっさら　えっさら

⑩　境港市朝日町の根平こうさん（明治 44 年生）の「舌切り雀」から「道行き歌」。（⑥ 48 ～ 56）

舌切り雀　こーろころ　舌切り雀　こーろころ（爺が訪ねて行くときの歌）

キーコや　バッタバタ　キーコや　バッタバタ
カランコ　トントン　カランコ　トントン
じいさんシシがない　ばあさんクダ　がない
カランコ　トントン　カランコ　トントン……（雀の機織り歌）

⑪　日野郡日南町神戸上の内田丑二さん（大正 11 年生）の「大力の新左の話」の石を運ぶときの歌など。（⑥ 140 ～ 144）

ｴﾝﾔﾗﾅ-　ﾖｲﾄﾅ-　ﾔﾚｺﾘｬﾅ-　ｿﾗ　引けﾅ-　ｿﾚこの岩が　ﾖｲﾄ-ｾ-
吉野にﾅ-　行くだとや　ｳﾝﾄｺｾ-　ｿﾘｬ　動いたぞ　ｱﾘｬ　生きとるぞ
ｴｲｺﾗﾔ-　家でもﾅ-　ｿﾘｬ　中でもﾅ-　ｱ　ﾖｲﾄ-ﾅ-　ｳﾝﾄ-ｾ-　ｿﾗﾃﾞﾓﾅ-
下でもﾅ-　ｳﾝﾄ-ｾ-

ｿﾚ　峠の茶屋で　ｴﾝﾔﾗｻ-　十八島田が手招きするよ　ﾖｲﾄ-ﾅ-

ｿﾚ　晩にはﾅ-　ﾊ　ﾖｲﾄ-ｾ-　色白の　この子がﾅ-　ｴﾝﾔﾗﾔ-　新左に　惚れたとﾅ-

⑫　八頭郡智頭町波多の大原寿美子さん（前出）の「種の藤助」から。狼たちの田植え歌。（④ 81 ～ 88）

種の藤助の　この田の稲は　　穂にはならず　水ばらみ

種の藤助の　この田の稲は　　穂にはならず　水ばらみ

⑬　米子市観音寺の浦上金一さん（前出）の「猿のドジョウ取り」で猿が歌う。（⑥ 62 ～ 68）

大ドジョウ　小ドジョウ　抜いてごしぇー　わしの命もたまらのわぁ

エートヤー　エートヤー

大ドジョウ　小ドジョウ　抜いてごしぇー　わしの命もたまらのわぁ

エートヤー　エートヤー

（4）問答の歌

①　江津市桜江町谷住郷の島田朝子さん（大正 12 年生）の「神歌好きな一家」から、家族のそれぞれが歌う歌。（⑭23～25）

ばばや　ばばや　早起きて　火を焚け　東も白(しら)む

嫁じょうよ　嫁じょうや　かいや杓子は　どこしにあーる

ありゃ　三階棚の裏によ　ありゃ　三階棚の裏によ

去年　坊やの父が言うたげな　また今年も得手を出いたな

アイツモ　ドンドンドン　コイツモ　ドンドンドン

②　隠岐郡隠岐の島町大久の吉山キチさん（明治 32 年生）の「歌好きな一家」から、家族のそれぞれが歌う歌。（⑮ 15 ～ 16）

シャモジが　見えぬ（嫁）

シャモジゃ　ｴ-　流しのﾖｰﾔ-　棚の裏ぁｴ（姑）

夕べ言うたこと　忘れたかぁ（祖父）

③　邑智郡美郷町都賀本郷の高橋ハルヨさん（前出）の「歌を止めた西行さん」から、亀と西行、西行と熱田神宮の宮司とが詠んだ歌。（⑭ 203 ～ 205）

西行が四国西国めぐれども　生き糞ひったはこれが初めて（西行法師）

駄賃取らずの重荷負いとは　これがことかや（亀）

これほど涼しきこの宮を　熱田が宮とはだれが言うたか（西行法師）

西行は西行く坊主と書いてある　東に行くとはこれはいかに（熱田神宮宮司）

（5）暗示の歌

①　鳥取県八頭郡智頭町波多の大原寿美子さん（前出）の「三枚のお札」から。雨

だれが小僧に婆の正体を知らせる歌。（④ 8 ～ 15）

小僧や　小僧や　婆さんの面(つら)ぁ見(み)い　小僧や　小僧や　トンツラ　トンツラ

② 八頭郡智頭町波多の大原寿美子さん（前出）の「ネコとカボチャ」から。雌鳥が飼い主に危険を知らせる歌。（④130～135）

野佐(ぬさ)の淀山さんを猫が取るー　コケッコーコケッコー

野佐の淀山さんを猫が取るー　コケッコーコケッコー

③ 隠岐郡知夫村仁夫の中本おまきさん（前出）の「猿婿」から、猿に呼ばれた猫が猿に呼びかける歌。（③ 110 ～ 114）

天がヒッカリ、大猿に当たる。つき臼返せば、子猿に当たる。

おればチョッコロリンも、相伴(しょうばん)に遭(あ)う。つき臼返せば、子猿に当たる。

④ 仁多郡奥出雲町竹崎の田和朝子さん（前出）の「子守り娘の助け」から。子守り娘が婿の応募者に対して歌う。（⑬ 191 ～ 194）

ねーん　ねーん　ねんねんやー　アーワーワーとも言いやれなー

シート（四斗）クショー（九升）ともおーしゃーれ

ねーん　ねーん　ねんねんやー

⑤ 浜田市三隅町東大谷の竹内藤太さん（明治 8 年生）の「子守歌内通」から。子守り娘が命を狙われている僧侶に対して歌う。（② 90 ～ 96）

りんかあじんと　かあじんと（【意味】隣家人と　家人と）

ににんがもうそう（【意味】二人が申すを）　ごんすれば（言すれば）

たそうをせっすと　ごんすぞ（【意味】他僧を殺すと　言すぞ）

やまにやまぁ　かさねて（【意味】山に山を　重ねて）

くさにくさぁ　かさねて（【意味】草に草を　重ねて＝早々に、の意）

デーン　デーン　デーン（【意味】出よ　出よ　出よ）

※ ④⑤は子守歌としてうたわれているので、別な角度から見れば謎解き歌でもあり、「作業歌」としても捉えられる。

（6）呼びかけと答えの歌

① 出雲市乙立町の伊藤アキコさん（前出）の「取りつかかひっつかか」から。（⑦145～148）

取りつかか　ひっつかか　取りつかか　ひっつかか（だれかの声）

取りつかば取りつけ、ひっつかばひっつけ（おばあさん）

② 仁多郡奥出雲町大呂の安部イトさん（前出）の「取りつくひっつく」から、山の奥からの呼び声と回答。事例は多い。（⑬ 33 ～ 38）

とーつかーか　ひーつかーか

とーつかーか　ひーつかーか（山の奥からの呼びかけ）

とーつかーば　ひーつけ
ひーつかーば　ひーつけ（おばあさんの回答）

③　隠岐郡隠岐の島町小路の竹本みやさん（明治 40 年生）の「瓜姫」から。木の上から瓜姫が下を通る爺婆に訴える歌。（⑨ 148 ～ 151）

お姫が乗るこそ　よけれども
あまんじゃくが乗るこそ　おかしけれ

C　前の項目に属さない歌

（1）動物の鳴き声

仁多郡内で語られていた昔話「ぴんこひよどり」で、おじいさんが飲み込んだ黒いヒヨドリの脚を引っ張ると出る妙音。（石塚尊俊他編著『出雲の民話』未来社発行・より 158 ～ 161）

「ピンコヒヨドリ、ピンピンピン、ゴヨノサカズキピンコピンコ」

（2）擬　音

①　浜田市三隅町福浦の佐々木誓信さん（明治 25 年生）の「閻魔の失敗」から。地獄の鬼の発するくしゃみなどの音。（② 8 ～ 16）

ヒャクショ　ヒャクショ　ヒャクショ
ブーッ　ブーッ　ブーッ
シュッ　シュッ　シュッ

②　隠岐郡知夫村仁夫の中本おまきさん（前出）の「竹伐り爺」から。爺の放屁の妙音。類話は多数あり。（⑨ 163 ～ 164）

錦　ザラザラ　こもしき　ザラザラ　五葉の松笠　スッペラポンのポン
カンカン金持ち　ブンブン分限者　酒の肴で　スッペラポン

類話からやや異なった音の例を挙げておこう。東伯郡三朝町吉尾の別所菊子さん（明治 35 年生）から。（⑤ 150 ～ 153）

白金　黄金　チャンポンピン（主人公の爺）
丹後たちゃタンタラタン　備後ビッチャビッチビッチ（隣の爺）

4.　おわりに

以上、昔話の中に出てくる歌であるが、その特徴を分類してみたものである。かなり強引にまとめたきらいはあるが、一つの試案として提示したまでである。分類の仕方にはまだまだ別な見方もあるかと思う。それのたたき台として考えていただきたい。（以上）